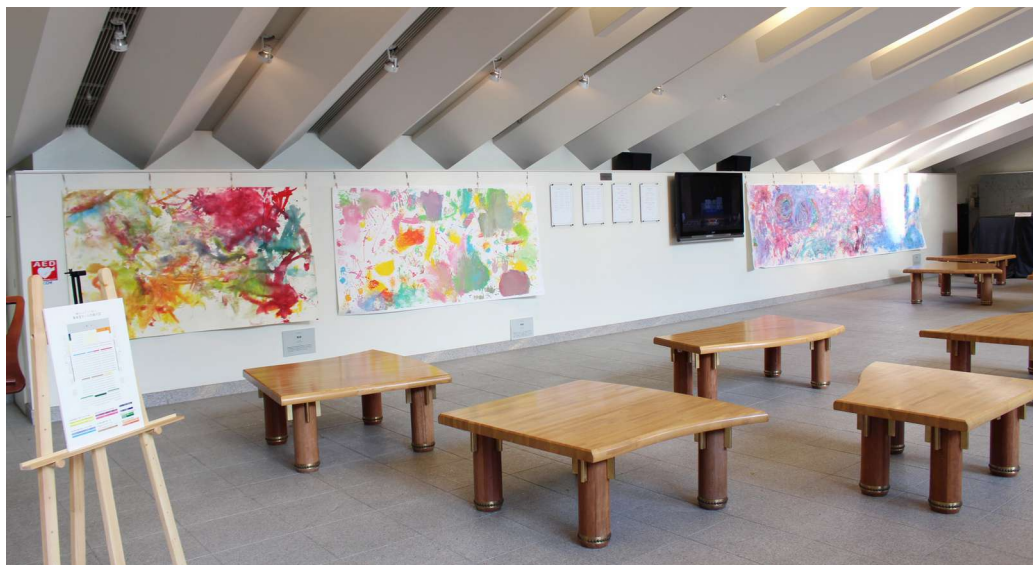
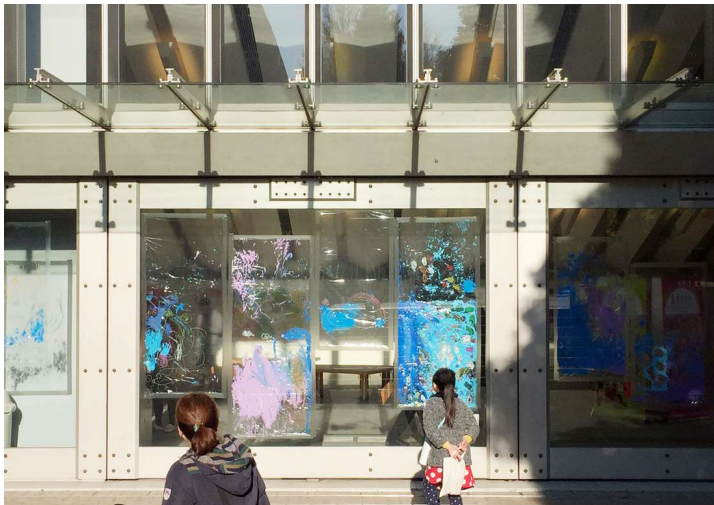


ARTS for HOPE/Wonder Art Production 活動報告書 2017年12月2日～3日

東京藝術大学 奏楽堂「障がいとアーツ展覧会」

“共に生きる”をテーマに、東京藝術大学が開催した「藝大アーツ・スペシャル2017 障がいとアーツ」の展覧会に、作品が展示されました。病院や東北で生まれたハッピードール、AFHの仙台拠点<ワンダーアートスタジオ>や宮城県立聴覚支援学校、南相馬のおひさまクラブ、仙台のみやぎデフ親子クラブで子どもたちと制作した作品が、2日間の開催中、ホワイエを彩りました。



「ともにつくり ともに生きる」

ボーダレスアートスタジオ Wonder Art Studio

ARTS for HOPE / Wonder Art Production

高橋雅子 (主宰・ホスピタルアートプロデューサー)



障がいとはつまり、個性なのではないだろうか・・・？

各地の重度心身障がいや精神障がいの病院、支援学校などで長年、創作プログラムを続けるうち、そう確信するようになった。ビジュアルアートに関しては、生まれた作品に障がいというフィルターは必要なく、作品が持つ個性や魅力が全てに思えた。見えない人が創った鳥の彫刻は意表をつく表現力だったし、知的障がい児の描く人や動物は愛にあふれ、見る人を幸せにする不思議な力を持っていた。



17年前に企画・オーガナイズした展覧会「アート・イン・パラダイス」でも同様の思いを抱いた。自宅の庭いっばいに林立するとぼけたブリキアート、蜂蜜と泥で描かれたハエがたかる絵、幻視体験から神父が創り始めた廃棄物の聖なる神殿など、アメリカ全土から集めた障がい者などによる独自の表現群は、強烈な個性のインパクトがあり、見るものの心をざわざわと刺激した。そこに至るともはや、障がいという特性は影を潜めていた。彼らは誰に示唆されるでもなく、人の評価を気にするでもなく、自分のパラダイスの中で、衝動的に気の向くまま、祈りや願いや楽しみのため、また生きる証として創りつづけていた。



それら経験を経て、この個性児たちの居場所を求められるようになり、仙台に障がいの有無や種類を超えたボーダレスアートスタジオを開くことになった。そこ、Wonder Art Studioにはユニークな子どもたちが集まってくる。難聴、ろう重複、ダウン症、自閉、多動、知的・身体・精神・聴覚・視覚・発達障がいに健常児と、様々な個性がありのままにつどい、自分らしく表現する場は予測不能な事態や新鮮な言動が飛び交い、発見に満ちた刺激的なスタジオとなってきた。それはとても自然で心地良く、実に楽しい。地球上に多種多様な動植物が混在し共生しているように、人間社会も本来そうあるべきなのではないだろうか？



芸術を通してその大切なことを伝える藝大アーツ・スペシャル「障がいとアーツ」において、ともにつくってきた子どもたちの作品を展覧させていただけるとは、何よりありがたく幸せなことに思う。このことで子どもたちが胸を張り、上を向いて生きる新たな一歩となることを心から願いたい。